鶴姫の念持仏

大正大学教授　玉山成元

五代将軍徳川綱吉の室は、前左大臣鷹司教平の女で、摂政房輔の妹である。寛文四年（一六六四）江戸に下って綱吉に嫁したが子供はなかった。側室小谷氏（お伝、のちの瑞春院）は五の丸殿といわれ、十三歳の年から綱吉の母桂昌院に仕えていたが、いつしか綱吉の目にとまり、延宝五年（一六七七）に鶴姫（明信院）を、同七年には徳松を生んだ。そして翌八年には本丸に入った。しかし徳松は五歳で早世したため世嗣がなかった。

天和元年（一六八一）七月十日、鶴姫は紀井の徳川綱教と縁組が決まり、貞享二年（一六八五）二月二十二日輿入れした。満七歳であった。しかし健康はすぐれず、宝永元年（一七〇四）四月十二日、二十六歳で極楽に旅立った。綱吉には、他の側室にも子供がなかったため、この年甲府にいた兄綱重の子綱豊を迎えて世嗣とした。これが家宣である。

祐天寺には、鶴姫の念持仏が現存する。タテ一五センチ、ヨコ一八センチの三折にされたもので、中央は鶴姫の描かれた

弥陀三尊の上部に祐天上人が十念の名号を書き、下部に「祐天」と署名して花押（サイン）を書いたものである。この三尊は実に可愛らしい三尊仏で、蓮台に乗った坐像である。像全体を金で描き、その上に墨でふちどりをし、部分的に強弱をつけたものである。円い光背は一層童顔をひきたたせる。子供のときから健康のすぐれなかった鶴姫に対する綱吉の心配は格別であった。そして護持僧の隆光僧正や快意上人に祈禱をさせて姫の安全を祈りつづけた。そのかいあってか鶴姫は成長したが、健康はあまりすぐれなかった。そこで母親のお伝の方は藁をもつかむ心境となり、祈禱の他に生き仏としてあがめられた祐天上人に頼んでその加護を願った。

祐天上人のお伝の方の出会いは、元禄十年ごろと思われる。それ以前から綱吉の母桂昌院と祐天上人との関係は深い。そうしたことから自然にお伝の方と祐天上人との関係も密接になり、江戸城の法談や増上寺の法談にも参加するようになり、その度に念仏信仰を深めていった。そしてついには、祐天上人のすばらしい説教に敬服し、自ら上人が説法される姿の人形を作り、桃の節句に雛壇に飾ってご馳走するとう有様であった。このようなお伝の方の帰依された根底には、単に念仏の教義がすぐれていることばかりではなく、祐天上人のご利益によって、たった一人残された鶴姫の命を護ってほしいという願いがこめられていたと思われる。また信仰に明けくれる環境に育った鶴姫も、いつしか念仏信仰にひかれていった。だから自然と阿弥陀三尊を描くまでになったのであろう。この三尊は成人

鶴姫の念持仏

大正大学教授　玉山成元

されてから描かれたものではなかろう。絵全体がどことなく子供らしい雰囲気がただよっている。三尊の顔も童顔で、とくに観音・勢至の二菩薩は、あどけない姿が残っている。いかなる人の目にも、可愛いい仏様という感じを与えるに相違ない。自分の描いた絵に祐天上人のお名号を書きそえてもらったのは、鶴姫自信の希望によるものか、母お伝の方の所望によるものか明らかではないが、いずれにしても鶴姫はこれを念持仏として肌身離さず持っていたものであろう。さすがに表装のときに着せられた着物はすばらしい。

三つ折念持仏の右側には祐天上人の小幅名号（小さなお名号）がついている。さらに名号の右には「天下和順」、左には「日月清明」という『無量寿経』の中に出てくる一句が書きそえられ、下部の「祐天（花押）」とある右に「大仏」という丸印がおされている。大仏とあるからには、鎌倉大仏を復興された後であることはいうまでもない。大仏の復興は正徳二年（一七一二）であるから、この名号は鶴姫のなくなられた六年後以上に書かれたものということになる。だから当初から三尊仏の右側にはられていたものではなく、後になってはられたものであろう。

左側の名号は、祐天寺二世（事実上は開山上人）祐海上人の名号である。鶴姫の三尊仏をはさんで、あたかも観音・勢至のような形になっている。しかも名号の左側に、「この弥陀三尊は、明信院様（鶴姫）の御筆なり、御形見としてこれを拝領す。香誉祐海（花押）」とあり、祐海上人が鶴姫の形見として拝領したものであることがわかる。祐海上人はお伝の方の作られた長悦の像を、陽春院香青からもらっているので、この念持仏もあるいは陽春院からもらったものかもしれない。いずれにしても、三折の念持仏は、最初は中央の三尊仏だけであったろう。その後左右に祐天上人と祐海上人の小幅名号をはりつけて表装したものであろうと思われる。

宝永元年四月十五日、鶴姫は増上寺に埋葬された。法名は明信院殿澄誉恵鑑光耀大姉、葬儀は増上寺の雲臥大僧正が導師となって行われた。やがて夫綱教は鑑蓮社を建て、白泉を別当職に命じて鶴姫の供養をすることになった。生前三尊仏を描いて念持仏とした鶴姫は、間違いなく極楽世界に往生し、蓮の台で朝夕たむけられる念仏を聞きながら安らいだことであろう。鶴姫の念持仏は、どことなくその姿をしているように思えてならない。